

20070328

厚生科学研究費補助金
障害保健福祉総合研究事業

人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究

平成13年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 北村 俊則

平成14年3月

目次

I. 総括研究報告	
人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究 北村 俊則	1
II. 分担研究報告	
1. 高校生における懲罰的、贖罪的罪悪感とその関連要因 蓮井 千恵子, 北村 俊則	3
2. 大学生における超自然現象への親和性（自己超越性）とその規定要因 北村 俊則, 岸田 泰子, 蓮井 千恵子, 吉川 武彦	12
3. 思春期の抑うつ・不安と防衛スタイルの関連性について 中島 央, 北村 俊則	20
4. 大学生における親密な他者との心理関係とその規定要因 —アダルトアタッチメントの形成に及ぼす 児童期の体験を中心にして 北村 俊則, 岸田 泰子, 蓮井 千恵子, 吉川 武彦	27
5. アメリカにおける特定集団に対する精神医学の対応に関する文献的研究 下地 明友, 北村 俊則 （資料）精神医学の発展に関する研究会（GAP）報告書 No.132 精神医学と宗教に関する委員会による フォーミュレーション アメリカにおける指導者と信奉者：宗教カルトに関する精神医学的アプローチ	32
6. カルト集団からの離脱者等に対する支援に関する探索的研究 伊藤 順一郎, 野口 博文 （資料）調査票	60
III. 研究成果の刊行に関する一覧表	69
IV. 研究成果の刊行物・別刷	69
（参考資料）ストレス対処行動に関するアンケート	

人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究

主任研究者

北村 俊則

熊本大学医学部神経精神医学講座

分担研究者

伊藤順一郎

国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰相談部

吉川 武彦

国立精神・神経センター精神保健研究所

研究要旨

人間関係の希薄化がもたらしたと考えられ、社会問題となったような、時に犯罪行為にまで発展する精神保健問題について基礎研究を行った。その結果、(1) 思春期の罪悪感には2種類（懲罰的罪悪感と贖罪的罪悪感）があり、懲罰的罪悪感が活性化されやすい人は、対象は関係なく、外部から攻撃されていると感じ、心理内界が不安定である：(2) 超自然現象への親和性は児童期の養育環境で一部規定されている：(3) 抑うつや不安に関連する特定の防衛機制（無意識的態度）が存在する：(4) 異性の親しい他者への安定した心理的關係性（アタッチメント）の成立には良好な親子関係が重要である：(5) 特定集団への精神医学的アプローチについてアメリカの取り組みが興味深いこと：(6) 特定集団からの離脱者の最社会化には相談の窓口となる公的機関が、有効な支援活動を展開している民間機関とも連携して、役割分担を行いながらサポートを展開することが重要であること：が示唆された。

A. 研究目的

人間関係の希薄化がもたらしたと考えられ、社会問題となったような、時に犯罪行為にまで発展する精神保健問題は、従来の精神病理学では扱いきれない。本申請研究案ではこうした諸種の精神保健問題を新しい観点で整理する。ことにオウム事件に見られるように、問題の所在を個々人の心理的特性に求めるだけでなく集団のそれに求めることが不可欠である。その上で、人間関係の希薄化から精神保健問題に至る介在変数を実証的に探り、なにゆえ人間関係の希薄化がこうした問題を惹起したのかを解明する。こうした研究の基礎には当然、人間関係そのものを調査研究の対象とする必要がある。本研究では、現代社会に特徴的な人間関係を量的・質的に評価する手法を探索する。こうした研究は、将来的に希薄化した人間関係に医療的・教育的・福祉的介入を行う基礎資料となる。さらに、こうした問題をおこす状況から離脱した者の社会再参加を阻む状況とその解決方法を提供する。こうした問題は、現在社会が速やかな解決を望んでいるもので、教育的・福祉的介入を行う基礎資料となる。さらに、こうした問題をおこす状況から離脱した者の社会再参加を阻む状況とその解決方法を提供する。こうした問題は、現在社会が速やかな解決を望んでいるもので

あり、可及的早期の研究成果が強く望まれるものである。

B. 研究方法

上記の研究課題に対し、本年度は以下のような分担課題について調査・研究を実施した。

高校生における懲罰的、贖罪的罪悪感とその関連要因

高校生（約900人）に対して罪悪感と攻撃性、抑うつとの関連について質問紙調査を行った。ある人物がコントロール不可能な事態に陥ったときの様子を描いた6個のケースヴィニエットを用意した。それぞれのケースについて、参加者は、登場人物（private）、多くの人々（public）、質問紙に答える人（person）が攻撃性を内に帰属するか、外に向けるか、外から攻撃されていると感じるか、また攻撃性を向ける対象が特定個人か、社会全般か、より高次の神、道徳といったものかに分類した質問に答えた。その結果、3因子に収束したケースはA、B、D、Eのpublicが多く、またその信頼度係数も高かったため、ケースA、B、D、Eと抑うつ得点、anger scaleとの相関を求めた。最終的に相似した相関関係であったケースAとEのそれぞれの因子を合わせて合成変数を作成し、

抑うつ得点、anger scale との相関を求めた。Kleinらが主張したように懲罰的罪責感が活性化されやすい人は、対象は関係なく、外部から攻撃されていると感じ、心理内界が不安定であることが確認された。

大学生における超自然現象への親和性（自己超越性）とその規定要因

大学生（約 4000 人）における超自然現象への親和性を Cloninger らの Temperament and Character Inventory (TCI) の自己超越 self-transcendence (ST) 尺度を用いて評価した。ST 得点は (1) 15 歳以前に父及び母から愛情ある養育を受けたもの (2) 15 歳以前に自己評価を上げるような体験を多く経験したもの (3) 現在のアダルトアタッチメントが安定しているもの (4) 家族機能が凝集性と柔軟性に富んでいる家族を持っているもの (5) 新奇性追求・報酬依存・持続・協調が強いもの (6) 損害回避・自己志向が低いもので、高値を示すことが明らかとなった。

思春期の抑うつ・不安と防衛スタイルの関連性について

高校生（約 900 人）における防衛スタイルを Bond らの Defense Style Questionnaire の日本語版である DSQ 88 を用いて評価し、抑うつ、不安、ストレス対処行動との関連性を推測した。各防衛スタイルは、主成分分析により、I：未熟防衛、II：ごまかし型防衛、III：気くばり型防衛、IV：成熟防衛の 4 型に分類され、さらに I は、Ia：言語化不全型防衛、Ib：境界型防衛の 2 型に下位分類された。抑うつとの関連では、I (Ia > Ib)、II が促進的に、IV がやや抑制的に関連し、不安との関連では、I (Ia < Ib) が促進的に、III、IV が抑制的に関連し微妙な相違がみられた。このことから、思春期の抑うつや不安の成立に、それぞれ特定の防衛機制が関与し、「自我の危機」を形作っている可能性が示唆された。

大学生における親密な他者との心理関係とその規定要因 —アダルトアタッチメントの形成に及ぼす児童期の体験を中心にして

大学生（約 4000 人）における、異性の親しい他者への安定した心理的関係性をアダルトアタッチメントの指標を用いて評価した。(1) 15 歳以前に父及び母から愛情がありかつ子の自主性を尊重する養育を受けたもの (2) 15 歳以前に自己評価を上げるような体験を多く経験し、家族内の重大な疾患や周囲からのいじめを体験しなかったもの (3)

家族機能が凝集性に富んでいる家族を持っているものが、異性に対して安定した心理的関係を持っていることが示された。

アメリカにおける特定集団に対する精神医学の対応に関する文献的研究

アメリカにおける特定集団に対する精神医学・精神科医療の対応について文献的検討を行った。精神医学の発展に関する研究会 Group for the Advancement of Psychiatry (GAP) 報告書 No.132 は精神医学と宗教に関する委員会によるフォーミュレーション Formulated by the Committee on Psychiatry and Religion を「アメリカにおける指導者と信奉者：宗教カルトに関する精神医学的アプローチ Leaders and Followers: A psychiatric Perspective on Religious Cults」と題して American Psychiatric Press (1992) として発表している。全訳を参考資料として巻末に掲載し、ここには抄録を載せる。

「カルト集団」からの離脱者等に対する支援に関する探索的研究

いわゆる「カルト集団」から脱会した者への相談・支援を継続して行っている機関に対して、支援の状況についてヒアリング調査を行った。相談機関では、メンタルヘルスの問題への対処に加えて、家族関係の調整や社会的なコンフリクトを解消していくために、多様な支援が行われていることが明らかになった。このような支援にあたっては、相談の窓口となる公的機関が、有効な支援活動を展開している民間機関とも連携して、役割分担を行いながらサポートを展開することが重要であることが示唆された。

研究協力報告書

高校生における懲罰的、贖罪的罪悪感とその関連要因

研究協力者

蓮井 千恵子 熊本大学医学部神経精神医学講座

主任研究者

北村 俊則 熊本大学医学部神経精神医学講座

研究要旨

高校生（約 900 人）に対して罪責感と攻撃性、抑うつとの関連について質問紙調査を行った。ある人物がコントロール不可能な事態に陥ったときの様子を描いた 6 個のケースヴィニエットを用意した。それぞれのケースについて、参加者は、登場人物（private）、多くの人々（public）、質問紙に答える人（person）が攻撃性を内に帰属するか、外に向けるか、外から攻撃されていると感じるか、また攻撃性を向ける対象が特定個人か、社会全般か、より高次の神、道徳といったものかに分類した質問に答えた。その結果、3 因子に収束したケースは A、B、D、E の public が多く、またその信頼度係数も高かったため、ケース A、B、D、E と抑うつ得点、anger scale との相関を求めた。最終的に相似した相関関係であったケース A と E のそれぞれの因子を合わせて合成変数を作成し、抑うつ得点、anger scale との相関を求めた。Klein らが主張したように懲罰的罪責感が活性化されやすい人は、対象は関係なく、外部から攻撃されていると感じ、心理内界が不安定であることが確認された。

A. 研究目的

両親の養育態度が子どもの罪責感を形成していく過程に大きな影響を与えることは、精神分析の分野においては古くから検証されてきた。Freud は、罪責感をアンビバレントに耐えうる能力と定義し、それが形成されるには、Oedipus 期を克服する必要があることを示唆した。しかし後の精神分析家達は、主に Klein (1921) は、子どもの分析を通して、罪責感が Freud の設定した時期よりもより早く芽生えていることを確認した。Klein は子どもの発達を 2 つの position（段階ではなく通過する時期の意）を設定した。より原始的なものを paranoid-schizoid position とし、それよりも後期に発達するものを depressive position と名づけた。paranoid-schizoid position では、攻撃性が非常に激しく、内的外的な刺激を防衛する手段も非常に原始的な投影、取り込み、分裂などが主に用いられるために、乳幼児の内界は非常に不安定となる。この時期乳幼児は、あまりに攻撃性が強いので、自己の攻撃性を自己のものとして理解する事が出来ず、外界から迫害されると感じる。これが罪責感の未熟なものであるとした。また懲罰的罪責感の活性は、攻撃性が非常に強く、さらにその心的エネルギーを自我化できていないことも意

味する。

一方 depressive position においては、攻撃性も穏かなものとなり、防衛もより発達したものが用いられ、乳幼児の内界は安定する。この position では、攻撃性も穏かなものになっているので乳幼児は攻撃性を自己のものとして理解することができる。この時期罪責感、自己の攻撃性が大事な他者を傷つけたことに対する償い、後悔として現れる。Money-Kyrle (1955) は、'psycho-analysis and ethics'において、未熟な罪責感を persecutory guilt とし、健康な人々にも見られるものであるとした。そしてより成熟した罪責感とを比較し、同じ要素で構成されているが、質的に異なっていると結論付けた。Grinberg (1964) は、Klein の理論を用い、罪責感を懲罰的、贖罪的の 2 種類に分けた。懲罰的罪責感より未成熟な自我に、贖罪的罪責感より成熟した自我に由来すると述べ、この罪責感の異なりが病的な喪の作業とそうでないものとの違いであることを主張した。これに対し Badel (1964) は、本能に対する防衛としての投影と取り込みの機能を無視しており、成人でうつ病に罹患している人であっても Oedipus 期の問題を呈する人もおり、その形式化は非常に固定的であると述べた。古沢 (2001)、小此木 (1979) らは、

インドのアジャセ王の伝説をもとにして罪責感には2種類に分けることができることを主張した。蓮井、北村らは子供をなくした両親にインタビュー調査を行い事例検討を行った結果、罪責感には2種類に分けることができ、子供をなくすなどのエピソードがあった場合、心理的に健康な成人と考えられる人であっても、一時的に未成熟な罪責感を体験することが理解された (in preparation)。さらに事例研究をもとにして、質問紙調査、統計解析からそれぞれの罪責感には強い相関関係にありながらも、それぞれが異なった心理、精神的現象と関連を持っているという結果が得られた (in preparation)。つまりどちらの罪責感がより活性化されているかということが理解されることで、その個人が *paranoid-schizoid position* もしくは *depressive position* が活性化されているか把握することができ、あまりにも懲罰的罪責感が長期にわたり活性化されている場合は、治療的介入が有効であると結論付けられた。

近年オウム真理教信者の起こした事件は、一般の人々に害を与えるものであったが、本人達は自分達が被害者であったと訴えていた。Klein の理論を用いれば、このような外界の捉え方をする人々は、懲罰的罪責感が非常に強く、攻撃性、衝動性の統制が悪いことが予測される。

これまでの調査では、罪責感について2項目の質問アイテムを用いてきたが、安定性などの面で問題があると考えられ、今回、質問紙を作成することにした。どちらかの罪責感が強く活性化されていることで、心理内界のあり方が予測することができ、さらには新興宗教集団に属することを希望するような人々について理解を深めることもできるようになることを目的とした。

仮説

1) コントロール不可能な事態に陥ったとき個人の情緒反応(怒り)に懲罰的、贖罪的罪責感が反映される。

2) 怒りの方向性は3方向(自己内部へ向かう場合、外部からの敵意として受け取られる場合、外部へ直接向く場合)に分けられ、その方向性と懲罰的、贖罪的自責感とが関連している。

3) 怒りが向けられたり、向いたりする対象は3つ(特定の個人、社会全般、神または倫理、道徳)に分類される。この分類された対象と懲罰的、自責的罪責感とが関連している。

4) 懲罰的、贖罪的罪責感に分けられたものと抑うつ、怒りとは関連しており、懲罰的罪責感の方が、贖罪的罪責感よりもより強く抑うつ、怒りと関連しているだろう。

B. 研究方法

対象

某県のA高校に在学中の高校1, 2年生を対象にアンケートを配布し、918票の有効回答を得た。アンケートは非連結匿名化後に処理を行った。調査に先立ち、A高校職員会議、熊本大学医学部倫理委員会の調査の方法、内容についての承認を得た。

尺度

本研究のために新しい尺度を作成した(資料参照)。

解析

解析はSPSS 10.0を用いて行った。初めにケースAからFまでの *private* と *public* それぞれについてプロマックス回転を用いた因子分析を行った。その結果因子が3つに収束したケースA (*private, public*)、B (*public*)、D (*public*)、E (*private, public*) についてそれぞれの因子ごとに α 係数を算出した。*public*の方が3因子に収束したヴィニエットが多かったこと、またその α 値が高かったため、ケースA、B、D、Eの *public* と抑うつ得点、*anger* との相関係数を求めた。その後ケースAとEの *public* のアイテムのみで3個の合成変数を作成し、抑うつ得点、*anger* との相関係数を求めた。

C. 研究結果

ケースAからFの因子分析結果と α 係数

それぞれのケースの *private* と *public* について因子分析を行った。スクリープロットが1以上のもので3因子に収束したのは、ケースA (*private, public*)、ケースB (*public*)、ケースD (*public*)、ケースE (*private, public*)であった。

次に3因子に収束したものに関してのみ、 α 係数を算出した。その結果どのケースにおいても *public*の方が *private*よりも α 係数が高いのでこれ以降の解析には *public* の質問項目を用いることとした。

表2. ケース A private

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case A private 3	.882	3.071E-02	6.711E-02
case A private 2	.849	2.968E-02	5.771E-02
case A private 1	.561	1.992E-02	-.111
case A private 7	-3.977E-02	.781	-3.028E-02
case A private 8	.127	.779	-4.446E-02
case A private 9	1.791E-02	.674	-6.890E-03
case A private 4	2.813E-03	-7.116E-02	.778
case A private 5	9.779E-02	-8.792E-02	.769
case A private 6	-.224	.317	.474

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

item1,2,3 $\alpha = .85$ item4,5,6 $\alpha = .65$ item7,8,9 $\alpha = .76$

ケース A public

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case A public 2	.865	2.183E-02	2.782E-03
case A public 1	.849	2.435E-03	-2.286E-02
case A public 3	.820	2.174E-02	2.951E-02
case A public 5	5.134E-02	.817	-6.463E-03
case A public 4	9.560E-03	.775	4.478E-02
case A public 6	-1.907E-02	.701	-4.676E-02
case A public 7	9.745E-02	-7.279E-02	.837
case A public 8	4.952E-03	9.567E-03	.823
case A public 9	-.298	.122	.393

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

item1,2,3 $\alpha = .85$ item4,5,6 $\alpha = .65$ item7,8,9 $\alpha = .75$

ケース B private

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case B private 1	.789	9.382E-02	-.255
case B private 4	.670	.155	8.306E-02
case B private 7	.657	-.226	8.355E-02
case B private 5	.379	9.369E-02	.353
case B private 2	1.974E-02	.896	5.946E-03
case B private 3	7.525E-03	.896	2.519E-02
case B private 9	-.176	.103	.797
case B private 6	-3.523E-02	-8.060E-03	.725
case B private 8	.274	-.146	.522

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

ケース B public

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case B public 3	.862	-2.520E-02	4.338E-02
case B public 1	.858	1.288E-02	-5.944E-02
case B public 2	.848	-3.322E-02	2.729E-02
case B public 7	8.734E-03	.832	6.607E-03
case B public 8	.112	.822	-8.075E-02
case B public 9	-.196	.544	.101
case B public 5	6.445E-02	5.629E-02	.769
case B public 4	8.152E-02	-2.376E-03	.714
case B public 6	-.105	-2.986E-02	.693

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

item1,2,3 $\alpha = .82$ item4,5,6 $\alpha = .90$ item7,8,9 $\alpha = .60$

ケース C private

パターン行列

	成分	
	1	2
case C private 2	.851	-6.521E-02
case C private 3	.849	-.114
case C private 1	.668	-.288
case C private 8	.608	.243
case C private 9	.438	.318
case C private 5	-.117	.715
case C private 6	2.939E-02	.611
case C private 4	-9.996E-02	.426
case C private 7	.378	.392

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 3 回の反復で回転が収束しました。

ケース C public

パターン行列

	成分	
	1	2
case C public 2	.843	-6.202E-02
case C public 1	.809	-.171
case C public 3	.807	-.130
case C public 5	.738	.142
case C public 4	.734	.145
case C public 6	.559	.146
case C public 7	5.885E-03	.889
case C public 8	2.689E-02	.888
case C public 9	-1.582E-02	.311

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 3 回の反復で回転が収束しました。

ケース D private

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case D private 7	.860	-4.187E-02	-3.265E-03
case D private 8	.851	9.897E-03	-3.005E-03
case D private 9	.611	-5.909E-02	.115
case D private 1	.461	.234	-.119
case D private 3	-5.991E-03	.942	1.952E-02
case D private 2	2.205E-02	.938	1.305E-02
case D private 4	-1.868E-02	-6.521E-02	.756
case D private 5	-9.269E-02	.144	.708
case D private 6	.169	-3.808E-02	.578

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

ケース D public

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case D public 3	.904	-5.974E-02	2.848E-02
case D public 2	.891	1.302E-02	-1.545E-02
case D public 1	.741	.138	-1.166E-02
case D public 6	-.103	.863	-3.403E-02
case D public 5	.143	.782	3.520E-02
case D public 4	7.936E-02	.730	-1.198E-02
case D public 8	-.117	.251	.737
case D public 9	3.439E-02	-2.179E-02	.668
case D public 7	9.009E-02	-.280	.639

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

item1,2,3 $\alpha = .85$ item4,5,6 $\alpha = .80$ item7,8,9 $\alpha = .63$

ケース E private

パターン行列

	成分		
	1	2	3
case E private 3	.934	-6.705E-02	.149
case E private 2	.929	-3.601E-02	7.454E-02
case E private 1	.601	.163	-.254
case E private 7	1.063E-02	.907	-8.464E-02
case E private 8	6.851E-02	.889	-4.101E-02
case E private 9	-.119	.661	.327
case E private 6	7.892E-02	6.325E-02	.740
case E private 4	-.118	-7.073E-02	.658
case E private 5	.130	5.659E-02	.504

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

item1,2,3 $\alpha = .95$ item4,5,6 $\alpha = .99$ item7,8,9 $\alpha = .45$

ケース E public

パターン行列 *

	成分		
	1	2	3
case E public 2	.934	-3.866E-02	6.123E-03
case E public 3	.908	2.034E-03	4.022E-03
case E public 1	.903	-2.841E-02	-3.929E-02
case E public 6	-.224	.938	-8.241E-02
case E public 5	.141	.793	4.338E-02
case E public 4	.340	.632	4.877E-02
case E public 9	.152	-.175	.754
case E public 8	-3.281E-02	.228	.668
case E public 7	-.226	-5.103E-02	.636

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

item1,2,3 $\alpha = .95$ item4,5,6 $\alpha = .99$ item7,8,9 $\alpha = .45$

ケース F private

パターン行列 *

	成分		
	1	2	3
case F private 2	.881	9.124E-02	-.117
case F private 3	.881	-6.261E-03	-5.550E-02
case F private 1	.548	-.239	.229
case F private 5	-2.124E-02	.723	-3.961E-02
case F private 4	-.125	.718	-3.288E-02
case F private 6	2.724E-02	.703	3.199E-02
case F private 9	.255	.488	.195
case F private 7	-8.022E-02	-2.213E-02	.939
case F private 8	1.276E-02	5.451E-02	.875

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 4 回の反復で回転が収束しました。

ケース F public

パターン行列 *

	成分	
	1	2
case F public 2	.855	-.108
case F public 1	.842	-.178
case F public 3	.838	-.141
case F public 5	.673	.243
case F public 4	.662	.151
case F public 6	.506	.265
case F public 8	.113	.750
case F public 7	-.169	.724
case F public 9	2.113E-02	.669

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 3 回の反復で回転が収束しました。

ケース A、B、D、E の public と抑うつ得点、anger との相関係数

ケース A、E については、比較的予測と一致し

ていた。一方ケース B と D に関しては、理論的仮説とは大きく異なった結果であった。ケースの内容を検討してみると、B、D はケースの内容がま

まったく異なっていた。そのため3因子に収束はしたが、ケースAとEとは異なったものである可能性が高い。またケースAとEは内容が似ていると考えられた。そこでケースAとEのpublicのアイテムを用いて、3因子の合成変数(compound)を作り、それらとHAD得点、angerとの相関を求めた。その結果、compound1は両方の罪責感と相関が強く、それ以外の変数との相関は見られなかった。この因子はpenitential guiltと考えられる。発達的に早期のpersecutory guiltと相関が強く、peni-

tential guiltが活性化されている場合、心理内界は安定していると考えられる。compound2がpersecutory guiltと相関が強く、したがって、発達的に後期のpenitential guiltとは相関が見られず、心理内界は安定していない。compound3はangerと強い相関があり、これは多少の不安定さをもたらすものの、攻撃性はpenitential guiltが活性化される心理的状态ほどは、ネガティブなものではないということを示していると考えられる。

ケースAの合成変数とその他の変数との相関

説明変数	Compound 1	Compound 2	Compound 3
Persecutory guilt	.06	.18***	.09**
Penitential guilt	.12***	-.03	.09*
State anger	-.10**	.09*	.18***
Trait anger	.01	.10**	.20***
HAD depression score	-.02	.07*	.21***
HAD anxiety score	-.05	.05	.19***
HAD total score	-.40	.07*	.23***

* P < 0.05; ** P < 0.01; *** P < 0.001

ケースBの合成変数とその他の変数との相関

説明変数	Compound 1	Compound 2	Compound 3
Persecutory guilt	.08*	.11***	.09**
Penitential guilt	.06	.03	-.03
State anger	.06	.13***	.18***
Trait anger	.01	.06	.15***
HAD depression score	.04	.07*	.11***
HAD anxiety score	.04	.11***	.08*
HAD total score	.05	.10**	.11***

ケースDの合成変数とその他の変数との相関

説明変数	Compound 1	Compound 2	Compound 3
Persecutory guilt	.22***	.10**	.04
Penitential guilt	.18***	.10**	.02
State anger	.10**	.14***	.04
Trait anger	.03	.08*	.09**
HAD depression score	.04	.08*	.07*
HAD anxiety score	.08*	.09**	.02
HAD total score	.06	.09**	.06

ケース E の合成変数とその他の変数との相関

説明変数	Compound 1	Compound 2	Compound 3
Persecutory guilt	.29***	.24***	-.04
Penitential guilt	.21***	.14***	-.09**
State anger	.07*	.14***	.11***
Trait anger	.01	.06	.12***
HAD depression score	.01	.04	.07*
HAD anxiety score	.10**	.11***	.05
HAD total score	.06	.08*	.07*

* P < 0.05; ** P < 0.01; *** P < 0.001

ケース A,E の合成変数とその他の変数の相関係数(public)

説明変数	Compound 1	Compound 2	Compound 3
Persecutory guilt	.15***	.19***	.05
Penitential guilt	.14***	.05	-.05
State anger	-.03	.13***	.17***
Trait anger	.01	.10**	.14***
HAD depression score	-.01	.08*	.08*
HAD anxiety score	.02	.09**	.07*
HAD total score	.01	.09**	.08*

D. 考察

仮説 1) に関しては、今回提示した 6 個のケースヴィニエットのうち、ケース A と E が妥当すると思われた。2)、3) については、今回の解析では、対象というより、方向性が懲罰的、贖罪的罪責感と関連していた。外部から攻撃される、迫害されるというアイテムの合成変数が懲罰的罪責感と相関があり、攻撃性が自己、社会、道徳に向けられていた合成変数が贖罪的罪責感と考えられた。4) については、懲罰的罪責感と考えられるアイテムの合成変数がより怒り、抑うつと相関があった。一方贖罪的罪責感は、怒り、抑うつとの相関は全く見られなかった。

今回の結果はこれまで Klein らが主張してきたことが統計的手法においても明らかになった。より成熟していると考えられる贖罪的罪責感が活性化されている個人の方が内的に安定しているといえることができる。どちらの罪責感がより強く活性化されているかによって、その人の心理的内界のありかたも把握できることが理解された。

昨今の子供による非常に衝動的、攻撃的な事件について考察する際、これまで述べてきたような罪責感と攻撃性の関連という視点から捉えることができる。少年事件において、当少年達の衝動コントロールは悪く、自身が加害者でありながら、あたかも本人が被害者であるかのように述べることが報告されている。こういった少年達は、攻撃性が活性化されるような状況に陥った際、paranoid-schizoid position まで容易に退行し自身の攻撃性を統制することができず、支配され、さらに攻撃性が外部に投影されるために他者から迫害されていると感じていると思われる。このような状況に置いては、懲罰的罪責感がより活性化されているのであろう。

また様々な新興宗教に属する人々の自我が脆弱で、人格的に未熟なことは数多く報告されているが(蓮井ら、2001)。こういった人々は、非常に不安定な心理、精神的状態であり、多少の刺激で懲罰的罪責感が活性化され、内的な危機に陥ることが予測される。このことはオウム真理教の信者達が外部から攻撃を受けると確信していたことと関連していると考えられる。

しかし、本調査にはいくつかの方法論上の限定がある。第1に、対象が全て高校生である。今回得られた結果が、高校生の特性を測定しているのか、もしくは罪責感について測定されているのか把握しがたい。この点に関しては、今後対象を広げることによって解決されると思われる。

第2に、それぞれの因子のまとまりが、質問形式に左右されている可能性が考えられる。今後調査を施行する際、質問アイテムの形式を順不同にした質問紙を作成する予定である。

第3に、罪責感の喚起は非常に状況に左右されやすいことが理解された。ケースの内容がAとE以外は高校生にとって想像しにくい内容だったとも考えられる。今回は理論的仮説に沿った3因子での解析をおこなったが、2因子に収束した他のケースについても、さらに解析を行い、仮説そのもの見直しが必要となることも考えられる。

E. 結論

今回用いられた投影法的ケースヴィニエットの質問項目のうち、理論的仮説に合致したのはケースA、Eのみであり、懲罰的罪責感に特徴づけられる因子は抑うつ感と強い相関を示していた。この後、共分散構造分析をおこない因子を確認し、ディフェンススタイルとの関係についても検討をしていきたい。

文献

- Badal, D. W. (1964). Comment of Dr. Grinberg's paper. *International Journal of Psycho-Analysis*, 45, 371-372.
- Grinberg, L. (1964). Two kinds of guilt-Their relations with normal and pathological aspects of mourning. *International Journal of Psycho-Analysis*, 45, 336-371.
- Klein, M. (1921). *Love, guilt and reparation and other works*. New York: Free Press.
- Klein, M. (1921). *Envy and gratitude and other works*. New York: Free Press.
- 古澤平作 (2001). 罪悪意識の二種—アジャセコンプレックス 小此木啓吾, 北山修 (Eds) アジ

- ャセコンプレックス,(72-83). 東京: 創元社
- Money-Kyrle, R. E. *Psycho-analysis and ethics*. (1955). In M. Klein, P. Heimann, & R. E. Money-Kyrle (Eds.), *New directions in psycho-analysis: The significant of infant conflict in the pattern of adult behaviour* (pp.421-439). London: Tavistock Publications Limited.
- Okonogi, K. (1979). Japanese psychoanalysis and the Ajase complex (Kosawa). *Psychotherapy and Psychosomatics*, 31, 350-356.
- Hasui, C., & Kitamura, T. (in preparation). Aggression and guilty feelings during mourning of mothers who lost an infant
- Hasui, C., & Kitamura, T. (in preparation). Two kinds of guilty feelings: Statistical approaches towards Klein's theory.
- Winnicott, D. W. (1986). *Holding and interpretation; Fragment of psychoanalysis*. (Y. Clifford series Ed. The international psycho-analytical library No.115). London: Hogarth Press.

研究協力報告書

大学生における超自然現象への親和性（自己超越性）とその規定要因

主任研究者

北村 俊則 熊本大学医学部神経精神医学講座

研究協力者

岸田 泰子 島根医科大学医学部看護学科
蓮井 千恵子 熊本大学医学部神経精神医学講座
吉川 武彦 国立精神・神経センター精神保健研究所

研究要旨

大学生（約4000人）における超自然現象への親和性を Cloninger らの Temperament and Character Inventory (TCI) の自己超越 self-transcendence (ST) 尺度を用いて評価した。ST 得点は (1) 15歳以前に父及び母から愛情ある養育を受けたもの (2) 15歳以前に自己評価を上げるような体験を多く経験したもの (3) 現在のアダルトアタッチメントが安定しているもの (4) 家族機能が凝集性と柔軟性に富んでいる家族を持っているもの (5) 新奇性追求・報酬依存・持続・協調が強いもの (6) 損害回避・自己志向が低いもので、高値を示すことが明らかとなった。

A. 研究目的

思春期は、人知を超えた超自然的な力を信じたり、興味を持ったりする時期である。生まれてまもなくの親子関係や、それ以降の友人関係といった、現実的人間関係を越えて、自分が時空を超えた宇宙の中の存在であることに気がつき始める時期である。これは、人間が社会的存在として自我を形成するために必要な過程であり、パーソナリティ成熟の一側面であるといえる。

超自然現象への親和性は、思春期の男女の思考・感情・行動に無視できない影響を与え、ここに問題があれば、生活全体にも大きな障害を来たしうる。近年、人間関係が希薄化し、それが成長期にある若い人々の心理的成長に影響を与えている可能性が指摘されている。

ところで、パーソナリティの成立には、遺伝の関与 (Heath ら, 1994; Loehlin ら, 1988; Loranger ら, 1982) と環境の関与 (Ferenczi, 1947; Bowlby, 1988) が考えられる。前者は通常、気質 temperament と呼ばれ、後者は性格 character と呼ばれる。Cloninger ら (1993, 1994) は気質と性格は別個に評価できるものであると考え、さらに気質と性格をいくつかの下位分類にわけて評価する方法を提唱した。

Cloninger ら (1993, 1994) はまず気質を、人間の行動特徴を規定するものと考え、行動の (1) 発

発 (2) 抑制 (3) 持続 (4) 固着を、あらゆる概念として (1) 新奇性追求 novelty seeking (NS) (2) 損害回避 harm avoidance (HA) (3) 報酬依存 reward dependence (RD) (4) 固執 persistence (P) を設定した。最後の固執は本来報酬依存的の一下位尺度であったが、因子分析の結果、独立した尺度（因子）としての地位を与えられたものである。これらの気質は、脳内情報伝達物質として、新奇性追求には dopamine が、損害回避には serotonin が、報酬依存には norepinephrine が、対応していると想定された。そして最近の実証的研究でもこれを支持する所見が集められつつある。

次に、Cloninger ら (1993, 1994) は性格を自己概念の成熟とともに発展するものと考えた。ここには (1) 自己志向 self-directedness (SD) (2) 協調 co-operativeness (C) (3) 自己超越 self-transcendence (ST) が含まれる。自己志向は、自分が選択した目的や価値観に従って、状況に合わせた行動を取り、調整できる能力である。次の協調は、社会的存在としての自己を受容し、集団への共感性をもてる能力のことである。自己超越は、統一的全体の本質的・必然的部分であることを認識できる能力のことである。瞑想や祈りによってこころの満足感や幸福感を感じ取る能力ともいえる。こうした3種類の性格の特性は発達の経過と共に発生し、成熟するものと考えられている。Cloninger ら (1993, 1994) はこうしたパーソナリティ理論に則

ってあたらしい自己記入式尺度を開発している。

Cloninger ら (1993, 1994) の理論の自己超越に当たる部分が、先に述べた超自然現象への親和性に非常に近い概念であると考えられる。そこで我々は Cloninger ら (1993, 1994) の開発した尺度を利用し、大学生における超自然現象への親和性の構造と、それを規定する要因の研究を行った。

B. 研究方法

対象

全国の大学生を対象とした性意識と性行動に関する調査の一貫としてパーソナリティおよび児童期の諸体験を評価した。日本の全大学 (615 校) の学長宛に調査の依頼を行い、協力の得られた 110 校 (18%) に 33,799 人分のアンケート用紙を配布、うち 4,226 票を回収したが、このなかで TCI の有効な回答は 4,064 票であった。このうち年齢が 25 歳未満で独身である 4011 人を本論文の解析の対象とした。

対象学生の専攻は、医・歯・薬学系 8.1%、保健・看護看護系 16.2%、理工学系 12.9%、教育・家政系 13.5%、人文科学・社会科学系 27.3%、芸術系 2.0%、その他 19.3%、未記入 0.7%であった。70% が男性であった。平均年齢 (標準偏差) は、男性で 20.3 歳、女性で 20.1 歳で、統計的には有意 ($t = 2005.6, P < 0.01$) に女性が高齢であったが、実際にはその差はわずかであった。

アンケート配布に当たって、記入はすべて自由意思によることを伝え、記載は匿名にて行った。

尺度

自己超越性 self-transcendence : 自己超越性を測定する目的に、Temperament and Character Inventory (TCI: Cloninger ら, 1993, 1994) の自己超越性 self-transcendence 得点を用いた。

TCI は Professor Cloninger の許可の下に木島ら (1996) が TCI の翻訳を行なった。TCI およびその旧版である Tridimensional Personality Questionnaire は日本国内の患者人口および非患者人口で使用されている (Yoshino ら, 1994; Kitamura ら, 1999)。これらの日本語版尺度の内的整合性や因子構造については Takeuchi ら (1993)、Kijima ら (2000)、Tomita ら (2000) の報告がある。質問票のページ数に限りがあるため、先行研究 (Kitamura ら, 1999) のデータを用い、項目・尺度得点相関の最も高い項目を選ぶことで各尺度 3 項目づつ (ただし P のみ 2 項目) を選択した。

本調査で用いた自己超越性 ST の項目は「私にはこれから何がおころうとしているのかわかるときがある」「自分の周りのすべての人との精神的、あるいは情緒的な強いつながりを感じることもある」「自分がすべての生命の源である霊的な力の一部分であると感じることがある」の 3 つである。

なお、選ばれた項目の項目・尺度得点相関は NS で 0.53 ~ 0.88、HA で 0.54 ~ 0.78、RD で 0.65 ~ 0.77、P で 0.78 ~ 0.83、SD で 0.67 ~ 0.79、C で 0.18 ~ 0.91、ST で 0.51 ~ 0.71 であった。

児童期における親との喪失体験：15 歳以前のいずれかの親との死別あるいは 12 カ月以上の離別を児童期における親との喪失体験と定義した (Brown ら, 1977)。父との死別を報告した者は 48 名 (1%)、父との離別を報告したものは 306 名 (8%)、母親との死別を報告した者は 19 名 (1%)、母親との離別を報告したものが 56 名 (1%) であった。

被養育体験：15 歳以前に両親のそれぞれから受けた養育については、Parental Bonding Instrument (PBI; Parker ら, 1979) の鈴木らによる日本語版を用いて評価した。PBI は被養育体験を回顧的・適及的に評価する自記式調査表である。PBI は 25 項目から構成されており、それぞれ 4 件法 (0 点 ~ 3 点) で計算する。12 項目からなるケア care と 13 項目からなる過干渉 overprotection の下位尺度が準備されている。ケア下位尺度は親の子に対する愛情ある態度を評価し、過干渉下位尺度は親が子に干渉し、自律性を否定する態度を評価する。PBI の信頼性・妥当性は Parker (1986) による報告があり、また日本語版の妥当性も Kitamura ら (1993) による報告がある。

児童期ライフイベント：調査表の中に 40 項目のライフイベントを挙げ、それぞれ何回体験したか、体験したならばその時の年齢 (複数回の経験なら年齢は 5 つまで) を答えさせた。いじめに遭うなどの持続的出来事については、発生した年齢ごとに回数を計算した。例えば 8 歳から 9 歳までの 3 年間にわたっていじめられたのであれば、回数は 3 回と計算した。ライフイベントは学校と友人、仕事、健康、家庭、経済・社会の 5 領域について調査し、望ましい出来事 (例：成績がクラスで一番になった) と望ましくない出来事 (例：親友に裏切られた) を組み込んだ。対象が大学生であるため例えば経済・社会の項目 (例：就職) などの体験率は極端に低いものがあつた。

次に、その出来事を 1 回でも体験した者の率が 10% 未満であるものは除外し、出来事の体験頻度を因子分析に投入した。因子数は scree test で決定し (Cattell, 1966; Zwick, 1982)、出来事どうし

の関連があることを想定し、斜交回転である PROMAX 回転を施行した。その結果 5 因子が抽出された。

第 1 因子に高い因子負荷量を示した項目は「図画・書道・工作・音楽などで一等になった」「運動で一等になった」などで、この因子を Top Star と命名した。第 2 因子に高い因子負荷量を示した項目は「転校した」「転居(引っ越し)をした」で、この因子を Relocation と命名した。第 3 因子に高い因子負荷量を示した項目は「病院に入院した」「大きな病気(2週間以上休学)をした」で、この因子を Own Disease と命名した。第 4 因子に高い因子負荷量を示した項目は「家族の誰かが重い病気やけがをした」「大きな地震や火災を体験した」などで、この因子を Family Disease と命名した。第 5 因子に高い因子負荷量を示した項目は「いじめられた」「親友に裏切られた」で、この因子を Peer Victimization と命名した。それぞれの因子で因子負荷量が 0.4 を越える項目の体験頻度数を合算し、そうした項目の総数で除した値を下位尺度得点とした。

アダルトアタッチメント：思春期の男女が親密な他者との間に持っている対人関係をアダルトアタッチメント adult attachment という。本来、アタッチメント attachment とは、親から離されたり、脅威に晒された際に児が養育者に近づく行為を説明する概念として造られた。Bowlby (1988) は、児が安全を生存を保障するために内的に備わった行動特徴がアタッチメントであると説明した。このアタッチメントが、思春期から成人期を迎えるまでに継続して存在すると考えられるようになり、成人が何らかの脅威に晒された時に、内的に持続していたアタッチメントスタイルが活性化されると考えられている。

アタッチメントスタイルは不安と回避の 2 つの軸を用いることで合計 4 つのスタイルがあるとされている。不安の軸は、一方では自己の価値と他者からの受容を感じるもので、その反対側には他者から拒絶される不安を示す軸である。回避の軸は、一方では親密さを求めるもので、その反対側には親密さを拒絶する軸である。この 2 軸を基礎に、思春期のアダルトアタッチメントは (1) secure (2) fearful (3) preoccupied (4) dismissing の 4 種類に分類される。secure タイプを有する者は、自己の評価が高く、他者への親密さを求め、拒絶される不安を持たない者である。fearful タイプを有するものは、自己評価も低く他者への信頼も低いものである。preoccupied タイプを有する者は、自己評価は低い但他者について持っているイメージは高いものである。dismissing タイプの者は、他者への評価は低い、自己については高い評価

を持っており、そのため、親密なものといえるより一人であるほうが安楽さを感じるものである。

本研究では Bartholomew ら (1990) の Relationship Questionnaire (RQ) を用いてアダルトアタッチメントを測定した。4 項目よりなり、いずれも 7 軒法で評価する。RQ の各スタイルの設問は以下の通りである。

secure 「心からその人となかよくなることは簡単だ。その人を頼ったり、またその人から頼られると安心する。独りぼっちになるのではないかとか、その人に受け入れられないのではないかと心配することはない」

fearful 「その人となかよくなると不安だ。私はその人となかよくなりたいと思っているが、その人を完全に信用したり、その人に頼ることは難しいと思う。その人とあまり近くなると自分が傷つけられるのではないかと心配だ」

preoccupied 「その人とこれ以上ない位になかよくなりたいと思っているが、その人は私が望むほど私となかよくなりたいとは思っていないのだとわかることが多い。なかのよい関係を持っていないと不安だが、私がその人を大切に思うほど、その人は私を大切には思わないのではないかと、心配になることがときどきある」

dismissing 「なかのよい関係は持たない方が気が楽だ。自分にとって一人でしたり、自分が満足することが重要で、人を頼りにせず、また人からも頼りにされないほうがよい」

また、positive self image 得点と positive other image 得点を計算するために以下の計算式を用いた。

$$\text{positive self image} = (\text{secure} + \text{dismissing}) - (\text{fearful} + \text{preoccupied})$$

$$\text{positive other image} = (\text{secure} + \text{preoccupied}) - (\text{fearful} + \text{dismissing})$$

家族機能：Olson (1986) の円環理論 circumplex model を用いた家族機能の評価を行った。円環理論では有機体としての家族機能を家族凝集性 cohesion と家族柔軟性 adaptability の 2 軸で評価する。この目的のために開発された Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III ed. (FACES-III) は 20 項目より構成され、いずれも 5 件法で採点される。日本語版は貞木ら (1992) によって開発された。また、Hasui ら (2002) は FACES-III の因子分析から家族凝集性 cohesion 9 項目 (例：「家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている」「家族は、一緒に自由な時間を過ごすのが好きである」) と家族柔軟性 adaptability 3 項目 (例：「家族の中で、様々な者がリーダーになる」「家族の中で、子どもが決定権を持つ

ている)を抽出した。今回のデータもこの2つ
の下位尺度で評価した。

解析

解析は SPSS 10.0 を用いて行った。ST を基準
変数とし、それぞれの説明変数ごとに t-test ある
いは積率相関係数を求めた。また、各説明変数の
取りうる得点、実際に得られた最高値と最低値、
平均値、標準偏差は表に示した。

C. 研究結果

ST に関する有効回答数は 3932 であった。得
点は 0 点～ 9 点までで、平均 (標準偏差) は 3.3
(1.7) 点であった。

人口統計学的変数と児童期における親との喪失体 験

ST と年齢に有意の相関はなかった。また ST 値
有意の性差もなかった。

早期の親との離別・死別体験の有無で ST 値を
比較しても、いずれの場合も有意差を見なかった。

表 1. 自己超越性と人口統計学的変数および児童期における親との喪失体験

説明変数	取りうる得点	最低値・最高値	平均値	標準偏差	ST との相関
年齢	18 - 25	18 - 25	20.2	7.3	0.007

* P < 0.05; ** P < 0.01; *** P < 0.001

被養育体験と児童期ライフイベント

父からのケアおよび母からのケア得点が ST と
有意の正の相関を示した。一方、両親の過干渉得
点は ST と何らの相関を示さなかった。

なお、父からのケア得点と母からのケア得点の
間 ($r = 0.44$, $P < 0.001$) および父からの過干渉得

点と母からの過干渉得点の間 ($r = 0.550$, $P < 0.001$)
には強い正の相関が見られた。

一方、児童期のライフイベントの中では Top Star
が唯一有意の相関を示し、こうした体験を多く持
ったものほど ST 値が高いことが示された。

表 2. 自己超越性と被養育体験および児童期ライフイベント

説明変数	取りうる得点	最低値・最高値	平均値	標準偏差	ST との相関
被養育体験					
父のケア	0 - 36	0 - 36	24.5	7.3	0.063 ***
父の過干渉	0 - 39	0 - 38	11.2	6.4	0.023
母のケア	0 - 36	0 - 36	29.1	6.0	0.035 *
母の過干渉	0 - 39	0 - 39	11.5	7.2	0.030
児童期ライフイベント					
Top Star	0 - 5	0 - 5	0.8	0.9	0.052 **
Relocation	0 - 5	0 - 5	0.5	0.9	-0.023
Own Disease	0 - 5	0 - 5	0.2	0.5	0.026
Family Disease	0 - 5	0 - 3.3	0.3	0.4	-0.022
Peer Victimization	0 - 5	0 - 5	0.3	0.6	0.035

* P < 0.05; ** P < 0.01; *** P < 0.001

アダルトアタッチメント

アダルトアタッチメントでは、secure 得点が高いほど、また fearful 得点が低いほど ST 得点が高いことが明らかとなった。また、preoccupied が低いほど ST は高い傾向も見られた。一方、positive self image と positive other image が高いと ST 値は高かった。

従って、アダルトアタッチメントが安定している（自己評価が高く、他者評価も高い）ものほど自己超越性が高いといえる。もし、児童期のアタッチメントが内的な作業モデルとして持続して青

年期にも活性化されているとすれば、養育環境がここでも無視できぬ影響を与えていると想像できる。

アダルトアタッチメントスタイルは相互に関連しており、secure 得点は他のスタイル得点のすべてと負の強い相関を示した (fearful, $r = -0.243$ $P < 0.001$; preoccupied, $r = -0.205$, $P < 0.001$; dismissing, $R = -0.174$, $P < 0.001$)。また positive self image と positive other image も強い相関を示していた ($r = 0.234$, $P < 0.001$)。

表3. 自己超越性とアダルトアタッチメント

説明変数	取りうる得点	最低値・最高値	平均値	標準偏差	ST との相関
secure	1-7	1-7	3.7	1.7	0.174 ***
fearful	1-7	1-7	3.3	1.9	-0.047 **
preoccupied	1-7	1-7	3.4	1.8	-0.037 *
dismissing	1-7	1-7	2.2	1.6	-0.031
positive self image	-12 - +12	-12 - +12	-0.7	3.7	0.110 ***
positive other image	-12 - +12	-12 - +12	1.7	3.5	0.105 ***

* $P < 0.05$; ** $P < 0.01$; *** $P < 0.001$

家族機能

家族機能では家族凝集性 cohesion および家族柔軟性 adaptability が良いほど ST 値が高いことが認められた。つまり、凝集性が強く、柔軟性が良好な家庭の育てられた子ほど、自己超越性が高い

といえる。

なお、家族凝集性 cohesion および家族柔軟性 adaptability は有意の相関を示していた ($r = 0.174$, $P < 0.001$)。

表4. 自己超越性と家族機能

説明変数	取りうる得点	最低値・最高値	平均値	標準偏差	ST との相関
cohesion	0-36	0-36	20.1	8.5	0.121 ***
adaptability	0-12	0-12	4.7	2.7	0.089 ***

* $P < 0.05$; ** $P < 0.01$; *** $P < 0.001$

他のパーソナリティ特徴

ST 値は、気質の下位尺度である新奇性追求 (NS)、報酬依存 (RD)、持続 (P) が高く、性格の

下位尺度である協調 (C) が強いほど高かった。一方、気質の損害回避 (HA)、性格の自己志向 (SD) が低いほど高いことが認められた。Cloninger ら

(1993, 1994) は、NS と RD が高く HA が低い者の行動上の特徴を「情熱家」と記載している。また、C が高く SD が低い者は「気分屋」あるいは「依存的」と記載されている。

表5. 自己超越性その他のパーソナリティ特徴

説明変数	取りうる得点	最低値・最高値	平均値	標準偏差	ST との相関
新奇性追求	0-9	0-9	4.3	1.9	0.041 *
損害回避	0-9	0-9	5.7	1.8	-0.189 ***
報酬依存	0-9	0-9	6.2	1.8	0.159 ***
持続	0-6	0-6	3.4	1.4	0.127 ***
自己志向	0-9	0-9	3.4	2.1	-0.127 ***
協調	0-9	0-9	5.6	1.5	0.106 ***

* P < 0.05; ** P < 0.01; *** P < 0.001

D. 考察

今回の所見は、(1) 15歳以前に父及び母から愛情ある養育を受けたもの (2) 15歳以前に自己評価を上げるような体験を多く経験したもの (3) 現在のアダルトアタッチメントが安定しているもの (4) 家族機能が凝集性と柔軟性に富んでいる家族を持っているもの (5) 新奇性追求・報酬依存・持続・協調が強いもの (6) 損害回避・自己志向が低いものが、超自然現象への親和性が高いことを示している。

Cloninger ら (1993, 1994) に従えば、自己超越は人格成熟の一形態であり、個人と環境の関わりを、単に一人一人の人間関係 (SD) や、人間集団の中での自己の所属意識 (C) だけでなく、非生物の環境や時空を超えた存在にまで共感的に接することのできる非常に人間的な能力であるといえる。こうした能力の形成が、今回の研究が示すように、環境によって規定される部分が少なからず存在することは予想されたことである。さらに、良好な養育環境、有機体としての機能が良好な家庭環境、安定した異性関係を持てる能力と、自己超越性が関連していたことから、自己超越という性格部分の発達はおそらく人格形成にとって大変貴重な要素を形成しているものと推測できよう。

だが、TCI の他の下位尺度との相関を見してみる

と、ST 高得点者は「情熱家」ではあるが、「気分屋」あるいは「依存的」であり、これは安定したパーソナリティとも言いがたい。特に SD が低いことはうつ病を起こしやすい性格として知られており、ST 得点がこうした脆弱性も孕んでいる可能性もあろう。高 ST 得点者が安定した人格発達を示すのか否かは、さらなる研究が必要である。

本調査にはいくつかの方法論上の限定がある。第1に、本調査はすべて自己記入式調査票によるものであり、個人の認知や感情のパターンに影響された結果であることも想定できる。しかし、説明変数が基準変数と示す関係は選択的なものであり、すべての所見がこうしたバイアスによるものであるとの可能性は低いと考えられる。

第2に、いくつかの説明変数は遡及的・回顧的なものであり、記憶の変形による影響を受けるかもしれない。しかし、PBI などについてはいくつかの実証的研究がその妥当性を支持している。

第3に、ここで想定された自己超越性が青年たちの今後の行動にどのような影響を与えるかについて、本研究は何の結論も出せない。この点については、別に追跡的研究を行う必要がある。

E. 結論

自己超越で評価した超自然現象への親和性は、

環境で規定される部分が少なくないと考えられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

文献

- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: an attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bowlby, J. (1988) Developmental psychiatry comes of age. *American Journal of Psychiatry*, 145, 1-10.
- Brown, G. W., Harris, T. & Copeland, J. R. (1977). Depression and loss. *British Journal of Psychiatry* 130, 1-18.
- Cattell, R. B. (1966). The scree test for the number of factors. *Multivariate Behavior Research* April, 245-276.
- Cloninger, C. R., Przybeck, T. R., Svrakic, D. M. & Wetzell, R. D. (1994). *The Temperament and Character Inventory: A Guide to Its Development and Use*. Washington University: St. Louis.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M. & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry* 50, 975-990.
- Ferenczi, S. (1947) Confusion of tongues between the adult and the child. *International Journal of Psycho-Analysis*, 30, 225-230.
- Hasui, C., Kishida, Y., & Kitamura, T. (2002). Factor structure of the FACES-III in Japanese university students (submitted)
- Heath, A. C., Cloninger, C. R. & Martin, N. G. (1994). Testing a model for the genetic structure of personality: a comparison of the personality systems of Cloninger and Eysenck. *Journal of Personality and Social Psychology* 66, 762-775.
- 木島伸彦, 齊藤令衣, 竹内美香, 吉野相英, 大野裕, 加藤元一郎, 北村俊則 (1996). Cloningerの気質と性格の7次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI). *精神科診断学*, 7, 379-399.
- Kijima, N., Tanaka, E., Suzuki, N., Higuchi, H. & Kitamura, T. (2000). Reliability and validity of the Japanese version of the Temperament and Character Inventory. *Psychological Reports* 86, 1050-1058.
- Kitamura, T., Kijima, N., Sakamoto, S., Tomoda, A., Suzuki, N. & Kazama, Y. (1999). Correlates of problem drinking among Japanese women: personality and early experiences. *Comprehensive Psychiatry* 40, 198-114.
- Kitamura, T. & Suzuki, T. (1993). Perceived rearing attitudes and psychiatric morbidity among Japanese adolescents. *Japanese Journal of Psychiatry and Neurology* 47; 531-535.
- Loehlin, J.C. (1992). *Individual Differences and Development Series: Vol. 2 Genes and Environment in Personality Development*. (ed. R. Plomin), Sage Publications: Newbury Park, CA.
- Loranger, A. W., Lenzenweger, M. F., Gartner, A. F., Susman, V. L., Herzig, J., Zammit, G. K., Gartner, J. D., Abrams, R. C. & Young, R. C. (1991). Trait-state artefacts and diagnosis of personality disorders. *Archives of General Psychiatry* 48, 720-728.
- Olson, D. H. (1986). Circumplex model VII: Validation Studies and FACES III. *Family Process*, 25, 337-351.
- Parker, G. (1986). Validating an experiential measure of parental style: the use of a twin sample. *Acta Psychiatrica Scandinavica* 73, 22-27.
- Parker, G. B., Tupling, H. & Brown, L. B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology* 52, 1-10.
- 貞木隆志, 榎野潤, 岡田弘司 (1992). 家族機能と精神的健康: Olson の FACES-III を用いての実証的検討. *心理学研究*, 10, 74-79.
- Takeuchi, M., Yoshino, A., Kato, M., Ono, Y. & Kitamura, T. (1993). Reliability and validity of the